



柳原敏夫様

2009.8.22

十日町

子藤光賀頬

御連絡資料、有難うござります。読みはじめた。しまなり
様々な言葉でほんと来ました。メッセージを書かれの後、
とお電話下さいました時、フッと思つたのが「勝手に、柳
原さんの声と、fax(ヨリチヨリ早さには、ハニヤさんぽつつか持た
ない人間には弊社以外の何者でもありません)にうなづかれて
描かれてはじめて」とも用紙にえんぱつでなく手書き
たのをこから書き直します。

何かくらい、文字通りのメールセンターにしておなつくれたら
いいな、と思ひます。

十日町から行く大島利子さんに参加料を渡して資料
をもら、こもらえるように言ひましたので、配布資料は手に入ると思
います。楽になります。

どうぞお元気で、これからも宜しくお願ひいたします。

合掌

P.S. 途中用事がありまして遅くなってしまい、申し訳ありません
集会の御成功を心よりおめでたし上げます。

妻がやつてゐる十日町市の自然食品店「からべ村」92006年
5月、6月のお知らせに「今月のことば」として次のような露木裕喜夫
さんの文章をのせました。

「私は百姓をやりながら、龍宮を見ました。私の見た龍宮は、海の底
ではなく、田んぼの中ですあります。はじめはカエルだけに気がつき
ましたが、カヌキリ、ツモ、トニボなど田んぼは虫の巣になってしま
いました。つまりタイヤヒラメが舞い踊った……生きものが最も良の環
境で生を楽しむ所、それが龍宮でありますか、陸上で生きることに住
むべき生きものか、生き楽しんで舞い踊る所、そこへ、年をとること
ともあれる人間の健康地がある……とうれしく思います。」

「ご承知のように、〈大自然〉は測り難い難い靈妙な仕組みで、一
大調和を保ち、想像を超えて一大秩序の体系を整えている。そ
の一端である。必要と充足の同時性、即ち必要あるものが、必要な
時に、必要有たれ、統てに直ぐに賄われていま一事に過ぎず、私
どもはただ驚嘆するのみである。

現在までの科学は、この大調和・大秩序に気がつかなかった。
これを破り、言ふことを、少しも意に介していないかった。」

露木裕喜夫『自然に聴く

—生命を守る根源的智慧—

より。

上越での遺伝子組み換え種除外実験栽培の2年目、新しく
2回目の署名活動を呼びかけた時で、自然の秩序を
破つて人間(科學者)も自らも認め、だから主張められてくるところ
を想を抱く人)が人工的に造り出(た)と鑑賞(鑑賞)者や
お米なんて全く必要もなく、許せないことだ"といふことを、この
自然農法の先進のことは"によって、よりハッキリと分かつ?そらへんに
といふ頼みを込めて載せたもの"です。

「必要と充足の同時性」。ディフェニシングで変わりない。

「必要なディフェンシンが、必要な時に、必要なだけ、残されてしまう」。
だからこそ、ディフェニシング耐性の種微生物なんて問題にならぬ
ならなかつたのだ」と今から人。生命的働き豆日々見つめている
人はそれだけでも充分なのだけれど、でもなあ、あのどうしも
生命的働きのみことさに感動したことがない類をしてドンカシ
なる研究者達と言つて、キヨトンとされるなどうだうなあ。そ
んな思いで、仲間うらに向けて書かれたのです。

「必要と充足の同時性」。まさに禅でいう「口呼吸同時」。
卵の中では鳴かなく声(啼)と母鶏が外から餌を嘴く(啄)。「同時性」。少くのすき間モズレモない大自然の営み。

「呼吸同時」な生物の、生命的働き、人体を通して、
そこでの経験ながら、馬(木曾馬オス)を飼いながらの農
業を通して、あるいは、露木先生はじめ、多くの先駆、仲間
の、生命的働きを眺めながらの農学者を見聞する間に、
常に感動、感嘆していた者にとって、エセ群科学者達の、
何を知らず、何を知らないということがえらくなじゆくが、どうに
も我慢ならなかつたのです。

自己の生命を守るために、また次世代に命をつなぐため、遺
伝子配列の基点を柔軟にすらしたり、変えたりしながら、身を
守る(「挑戦と元戦」)。今回のイネに組み込まれたヒエヌ
(されついた?)除草剤耐性遺伝子も、勿論モニサント社の大
豆に使われてゐるけれど、除草剤といふ人間の浅知恵が造
り出したキのヒ元戦する、けなげな植物の生きる意志の、
つまりは生命的働きの、つまり出したキのである。けなげな、
しかし、強靭な。それをまたまた、分析的に、分け、区别し、
取り出して、更に特許とし、自然界と人々の営みたる農の
首領の道筋したDNAの中にぶち込むという〈志念〉。

今も思い出します。あの上越リーションフーラガードの合同勉強会で、子供を持つ親の身でありながら、自宅の庭に除草剤を撒く、と発言した被告側の研究者に対する会場全体の嘲笑（いさび）あり、あるいは、十日町の農家の腹の底からの怒り。そこには、本当に自然と、この自然界につながった、一人一人の市民の、自分の生命に毒を撒きかけられたという自然な感情が湧きあがったのだと思ひます。

このティフェニシングについて、そして原内の結腸菌や耐性菌について、ツッキリと分ふらせてくれた木暮先生の上越での市民に向うての講義。生井先生の、七月の集会での、大学三年間の授業内容をコンデンスしてくれたテキストの講義。植物のセレクスと交雑についての手に行げるお話。1本ならぬ、かかれさうに自己の正体を破壊された遺伝子組み換えイネの危険性をしきりと私達に教えてくれたお二人のじかの声。また極めて多くの国内外の研究者、学者の文字を通しての声からどれほど私達の気持ちを強めてくれたことでしよう。

この上越の北陸センターで起きた――そして今も起きている――それは裁判といふ形で、というよりもなく、ティフェニシング耐性菌が既にこの自然界に解き放たれてしまはれなつ、という緊張感、そして毎年、交雑が繰り返され遺伝子汚染が拡大しているかもしれないという不安感といふ形で――GM1体の野外実験といふ野蛮な行為。それは、すでに長年にわたって行なわれているGM作物の栽培と利用の世界的な拡大の中ではほんの砂粒くらいの事件であります。

しかし、それは歴史的にみれば、西洋で生まれ育った人間であり、また、東洋の片隅で起こった宗教の火が波を換骨奪胎して自己流に拡大したキリスト教徒が、その物欲の限りをつけて、他の広大な地域のものを略奪し、人々を皆殺しにして歴史につながりにあがる、最近の出来事のひとつなのだと思います。

昨年 カトリック法王ベネディクト6世が南米に行なった時、過去のカトリック教徒が先頭に立って犯した現地人の暴殺、略奪について謝罪をしなかったことに、現地の司祭からさえ批判の声が上から挙げた。私もカトリックです。この頑固な西洋精神を内側から突き崩すことが必要です。

幸か不幸か、「食物なき所生命現象なし」、「歴史思想も食物によつてつくられる」ということに目覚め、食べ物を基点として東洋の哲学を学んだ私達にとって、このGM作物という、一度自然界に放たれれば、いつまでも存続、拡大してしまう危険性を手むやうは絶対に許すことにはできないのです。

まじでやあ米、あ米立んでます。トニテモナイ!!
「何がおかしい、じ配で。」参議員会館で聞かれた若い母親の声は、生命の奥底から湧き上がってくる、生命の官能を打ち切られてしまうのではないか、という危機感だけあり、だからこそ理屈ぬきで共感できました。

私達の命を造り、育くす「生命エネルギー」、宇宙の存在エネルギーは、例えばアニメイトの形にハッキリ現われてゐるようだ。対数スパイラルの力線となって、自然界を造り上げています。ありとあらゆるものに、このマークを見出しがちます。DNAは生命体の、最微な、そして最終的な、スパイラルの終点の現われだと思ひます。(二重らせん)。

このDNAを造り上げたスパイラルの力線は、DNAを通つて、無限宇宙に帰つていく。従つて、DNAを切ない貼つたりすることは、この無限宇宙からのスパイラル(生命エネルギー)が無限に帰る道すじを切斷してしまうことになります。うするところに、エネルギー過剰という全ての災厄(個人の身心の不調、自然災害、社会不安、etc. etc)のもとが生じしまします。

大豆、キャーラ、綿、とうきこし、稻等、一つ一つの個体の細胞(DNA)の数を考えたら、スパイラルが通過するDNAの数は考えられないほどの数です。そしてまた「一滴の水に宇宙の全存在エネルギーが凝縮している」という東洋伝統の教えは尊重されなくてはなりません。

そして今、南北アメリカ大陸をはじめ、全世界で“行きかず”GM作物栽培の大さを考へれば、この地球との生命エネルギーの流れが、どれほど“切掛け”、過剰になつてしまい、想像することもできません。

東洋医学では、氣の滞留した状態を邪氣と表現し、その邪氣を取り除く手立てを考えます。GM作物栽培によつて、今、地球上の多くの、大量の邪気が生まれているたと考へられないでしょうか。私達が遺伝子組み換えイネに対する時、いつもそんな危機感を持っています。

全ての人が、あるいは動物が、自然が与えてくれた食べ物を、普通に、自然に食べられるこそ、この当たり前の、いのちを存続させる堂宇を実現させたい。それだけが食物に長い間かかる、これまで私達のたったひとつつの願い“あり、ナリ”であります。

2009年8月22日

十日町市

11°ウロ 安藤泰弘 光耀額